

本願の念仏

—入出二門の源泉—

安 田 理 深

行ということについて話をします。行ということは、非常に大事です。行ということに対して信ということが非常に微妙な関係ですね。法然上人は、行をやかましくいわれる。親鸞聖人は、信心一つ、こういうふうになっている。法然上人は、念仏為本、親鸞聖人は、信心為本といわれている。そういうふうには念仏為本をすすめて親鸞聖人は信心為本を説く、というふうに見えるならば、これは、大いなる誤りという感じがしない。念仏為本というのは、法然上人の考えというより、本願そのものだと思ふのです。本願の「本」という字は、行を本とする。念仏の行を本として、願をおこす。だから、それを本願といふのです。本願は、何が本か。行が本なのです。行によって、その行について本願をおこす。そして、本願によって行をえらんで、本願廻向する。その行によって、仏自身を廻向するのです。それで、選択本願といふのです。ただし、その行についての要点は何にあるのかというと、信ということにある。行のかわりに信をたてるのではない。行の要点は信。こういうことがある。声を出すというように、要点ではない。蓮如上人の言葉に「当流においては、弥陀たのむが念仏」というのがありますが、弥陀をたのむということが念仏であるというような言い方も、要点をいわれるのです。念仏というものにおいて、要するに、自己を見いだすということ。本願の呼びかけをきくということがその要点である。そういう意味で、本願の呼びかけ

といっても、行がないと聞きようがない。空中にあるような弥陀になってしまふ。幻人の如くこれを聞いたということになってしまふ。そうでしょう。そうすると、巫女みたいになってしまふ。そういうのは、こえなきこえというような意味ではないのです。それは、幻影なんです。

やはり、本願という行。行というのは、これは、唯識の学問で、現行ということがありますね。「現」という字はどういうことかという、ウィルクリヒカイト (wirklichkeit) というのがドイツ語にあります。普通は、「現実」と訳すのです。けれど、現実という言葉の方が意味がないのですね。現行というのは、本願がそこに現実しているということですね。本願というものは、実は頭で考えたものではなしに、そこに生きてはたらいっている。それが行というものです。そういうことが大事なのです。そこで、行ということについて、リヴィング (living)、生きるという意味がある。英訳の場合「行」という字は、なかなか翻訳しにくい字ですね。普通は、プラクティス (practice) と訳す字ですけれども、鈴木大拙師が、非常に思想的な翻訳をしているのですね。先程から、行者という言葉は、生活者といいましたが、「生活」という字で「行」をあらわしたのです。毎日〳〵行があるのですね。だから、行者は、生活者だと。行を訳して、英語では、リヴィング、生きるという意味ですね。そういう意味でリヴィングとあらわしたんです。「行」という字には、行体という意味もありますね。現行と行体。サブスタンス (substance)、実体という字があるんですね。体というと、何もかも実体だと、こう考えるが、そうではない。「行体」。それはね、たてたものではない。本願そのものを体というのです。本願そのものとは、名号そのものが本願そのものである。こういう具合ですね。それを、行体というのですね。そういうことは、なにか考えた体ではないのですね。生きてはたらいっている実体。あるいは、今日の言葉でいえば、「実在」だ。本願がそこに実在している。頭の中に実在するのではない、現実にはたらいっている、本願が生きてはたらいっている、ということに本願が実在しているのです。「行」という字は、そんな意味である。だから、「信」といっても、その「信」が生活というものを、信仰生活というものを

っているのです。「信」が「行」をもっているのです。行のない信というのは、これは、生活がない。ただの「思い」だ。だから、いつも思っているだけなのです。力が無い。「願」とか「行」とか「信」とかいう字は、真宗教学の根本概念です。非常に大事な字であってですね、少し厳密に言わなくてはならない。親鸞は、『教行信証』で、大行は事実だということです。大行、大信。なにか、大が二つあると思うけれど、そうではない。大行にたった信心だから大信。逆ではないのです。大信の行だから大行というのではない。大行の信だから大信ということです。逆を考えてはいけません。だから『略文類』において、親鸞は、大信といわずに、「大行」「浄信」という。ほんとうに大がつくのは、行。行に大がつく。その行によってたてられ、行にたてられた信です。つまり、信ずるとは、疑いがはれるということですから。疑わないのではない。疑おうにも疑えないということですから。そういうことがなければ、信といえないでしょう。ところが、疑えないというのは、何かといえれば、議論で疑えないというのではないのです。事実として、本願が現に私にはたらいっている事実です。我の全身全霊を満たす、というふうに行がある。それは、事実ですから疑いようがないのです。あまり考えるものではないのです。それは、つまり、論証するのではない。実証するのです。本願が実証される。そういうものでないと、信は、活気をもたない。疑えないということをよく云うのだけれども、疑えないというのは、考えをささむ余地がないということですから。本願が全部支配して、そこにすぎがない。これはなんだろうというようなこと、それが二つある場合は問いを出す。自分に対して本願というのが二つある場合に、これはなんだろうということになる。本願が一つの場合はですね。本願が我にきて、我となつてある場合は、これは、疑うという余地がありません。そういうものが、厳密な意味の信心というものです。まあ世間には信仰というものがありますね。けれど、親鸞の言葉では自信といえます。信心といわず自信といえます。それは、人間の心ですね。念仏は、如来の本願の行だけれど、それを信ずる心は人間の心で信ずる、というのだったら二つになる。信ぜられるものは如来だけれど、信ずる心は人間というのであれば二つになる。そして、二つである場合を疑いということです。本當は二

つになる余地がないのです。如来が衆生のなかに入り満ちているのだから。その時はじめてですね、信というのが行をもった信です。信において行がはたらくのです。こういう具合に、行というのを大事に考えようということなのですね。それで、なぜ行というものをつまらんように考えるか、たいしたものではないと考えるかということ、行を努力だと思うからです。

それで、行というものはたいしたものではないと、こう思うのです。念仏というと、だれかが、どこかにおいて、
#ナンマンダブ#と声を出すというような、一つの個人的な行為だと思う。それが、行というようにいえるのでしょうか。それらは、業といった方がいいんですがね。それは、人間の努力です。行というものが、はじめから努力と、こう考えられるから、行はつまらないものになってしまう。そして、信心が大事だと、こう思う。行を捨て、信をたてると。しかし、その信に行がなければ、信は確信がない。無内容ですね。だけど、無内容に耐えられないから眼をつむる。こういうものは、信仰に酔ったのです。酒に酔ったのと同じです。酔っているだけの話じゃないのですか。目を覚ましてみれば、空虚だ。空虚に耐えられないから酔っている。目をつむれば酔う。それは、なぜかといえば、行がないからです。行というものを、純粹に考えてみたことがないので。

大涅槃というようなことがありますね。それから、大慈大悲ということがある。广大無辺際というのも大慈。仏教では、「広」という字が非常に大事な字なんです。「深」という字も大事ですけれども、深いというと、深広無涯底ということですね。深いということと広いということは、これは互いに大事なのですけれど、仏教では、深いという字は、覚りをいうのです。阿弥陀如来の覚りを「深」という字で表わすのです。「広」というのは、因位本願のことだから、弘願というのでしょう。「弘」というのは、広という意味です。一切衆生をもって我となすというような願です。それで、「广大」というのです。仏の覚りというのには、二乗のうかがうところでない。深密だということで、

仏の覚りは「深」という字であらわすのです。因位の願心はですね、「弘」という字であらわす。果上の智慧は、「深」という字であらわす。智慧というけれども、深いのは智なのです。広いのは慧なのです。広慧という字もあるまあ、そういうことは、非常に言葉づかいが厳密ですね。そういうところから、本願の大慈、大悲の行、これは、御名ということです。御名というのは、これは、名号をあらわすことはまちがいない。大行ということで、これは、本願の名号をあらわすということが大事なのです。本願の名号というのは、どういうことかというところ、「一切衆生をして、無上大涅槃にいたらしめたもう大慈大悲の誓いの御名」である。形容詞が大変長いですね。本願の御名というのは、どういう御名であるかというところ、一切衆生をして、無上大涅槃(まあそういうところに大という字がありますね)にいたらしめたもう、大慈大悲である。やはり、大なのです。かさねてあるでしょう。大慈大悲の御誓いである。本願の御名である。まあ、御名というと、大変単純になるようだけれど、一切衆生、これが大、広いわけです。一切衆生をして、平等にですね、無上大涅槃というものにいたらせようという、大慈大悲の、そういう大願の御名である。このように、大という字が、無限にかさねられていますね。そういうふうに、大行という言葉のもとがあるのではないかと思えます。

そういう意味で、大というのは、人間の努力なんか超えているという意味なのです。人間の努力なんか、必要としない。人間の努力というようなことを求めない。こういうような意味が大なのです。大行でもいいのですけれども、『浄土論』の場合は、『浄土論』の用語がありましてですね、「如実修行」という言葉があります。「如実」という言葉は、純粹という意味です。純粹なる行ということですね。やはり、それで、如来の行ということであらわすのですよ。無論、その本願の名号についてですね、如来の御名ということであらわす時に、如実修行ということを行います。そういうことがいえるわけですね。「如実修行相應は 信心ひとつにさだめたり……」という和讃があるでしょう。あれです。あれは和讃にいつてあるけど、なかなか大事な言葉なのです。「信巻」の中心概念です。あそこに

は、やはり、行信とか、行とか信とかという、なにか容易ならん問題が語られているのです。信仰問題というのをずうっとおさえてゆくというですね、最後には、行信というようなことへつまってゆくのですね。それだから、やはり、「行巻」「信巻」が中心だということです。浄土とかなんとかいうことは、後になってしまおう。行信というところにもう浄土がひらかれてくる、ということですね。行信論というものが、非常に大事な意味をもってくるわけです。

五念門の場合はですね、第二讚嘆門というのがあります。五念門というものは、五つの念仏という意味ですね。念仏のほかに五念門ということがあってはない。念仏というものに、五念門という意義を持っているということです。五念門に「念」という字をつけたのは、そういう意味です。五つあるけど、結局念仏だと。同じことを云っても、善導大師には、五正行ということがあります。五正行というと、これは別です。五正行では、称名念仏というものはね、第四番目に、称名念仏というものがありません。五正行の中の第四番目に称名念仏。それから、第五番目は、讚嘆供養。それから、前の三つは、読誦、観察、礼拝です。そして、中心は観察なのです。観察と区別して、称名念仏をたて、そして、讚嘆、こういうのが五正行です。なにかこう、比較対応しているのです。観仏とえらんで称名念仏をたてたのです。だからして、前三後一。五正行の中の前の三つと後の一つ、これは、助業で、四番目にある称名というものが正定業だということです。それによって、親鸞は、「本願名号正定業」と『正信偈』の中で表わすのです。なぜ、正定の業かというと、本願の行だからです。本願によって決められた行なのだからです。我々が決めた行ではないのです。本来、本願によって、我々をして、大涅槃にいたらしめたもうところの名まえだということです。我々の方が、勝手にそうしたのではない。ところが、観察とか読誦とかいうものは、そういうものではないのです。それは、往生の行じゃない。往生の行にするのです。往生の願いによって、観察というものの価値が往生の価値に転ずるのです。価値転換なのです。まあ、いってみれば、学問すること、研究することはですね、我々の救いのためにあるものではない

のです。

しかし、往生浄土の願いに応じて学問すれば、学問ということも往生の行になるという意味を持ってくる。意味が変わってくる。そのようなことなのですけれども、念仏というのは、我々が往生の行にしたのではない。本来往生の行なのです。向うの方から、本願によって我々に与えられているのです。我々が決めたのではない。ならべてありますけれども、質が違います。実は、それは、我々の努力を超えているのです。我々の努力を超えている本願の行というものを、我々の努力の中に無理に入れて示してあるというところに、方便ということがあるのでしょうか。まあ、そんなこともですね、何か、どこかの教科書のどっから引き出して来たものではないでしょ。結果から云うと、五正行ということも、どうしてそんなことを決めたのかというと、何か、天降りみたいで、教科書のようにですが、そうではないのです。三国の高祖の論釈の中に、はっきり出ているんですね。そういうものを総合してくるものとして、『観無量寿経』があるのです。総合してくるといえるのは、誰かが頭でそのようなものは考えて書いたというのではないのです。菩提心を発心して、往生成仏という願をおこして、そして、歩んできた求道の歴史がですね、その中に拾い集められているのです。みんなそういうものですね。読誦というのもですね、観察というのもですね、みんなそうなのです。

往生の一大事のために考えなくてはならない。本当に教えを求めて、正確に教えを読まなくてはならない。まあ、いろいろなそういうような努力の記録なんです。教科書を読んで決めたということではありません。それをですね、善導大師は、「諸善万行」と、こう云った。諸善万行というのは、どういう意味かということ、あらゆる努力という意味です。一大事ですから、渾身をかたむけて努力して道を求めてきたのです。それは、記録の中にある言葉なんです。だから、迷っていると言われても仕方がないけれどもですね、迷っているといっても、楽しみに迷っているわけではないのです。全身全霊をかけて迷ってきたのです。本願を求めて。そういうような過程があるわけです。そういう話

ですよね。我々にも、みんな身に覚えがある。学校へ行って本読んでいても、楽しんで読んどの人はいないでしょう。哲学なら哲学と、そういう門をたたいていることがあるけれども、それは、何か、一大事を発見したいところから考えるのでしょうか。みんな身に覚えがあるのですよ。

それはそうとして、そういうことと五念門というのはちがうのです。五念門は、全部が念仏です。あらゆる行の中の念仏ではない。五念門といった場合は、いろいろ行があるというのではない。行は一つしかない、というのです。本願に目が覚めない間は、いろいろ行があるようにみえる。しかし、本願に目を覚ますと、そんなものは行ではない。行は一つなのです。一乗だ。あるいは、一道である。無碍の一道なのです。だからして、『正信偈』に「定散」という字がありますが、諸善万行を定散というのです。観察だろうが、読誦だろうが、讚嘆だろうが、みんな定か散かに入るのです。言ってみればですね、観だけが定だ。あとは全部散に入る。念仏は、散に入る。観察だけは定に入ります。あとは、みんな散に入る。五正行から考えると、念仏と観仏とは、互角ではないのですね。観仏の方が上なのです。そうなるのです。そして、観仏ができない者は、仕方がないから、称名念仏をする。このように並べ比べる場合は、観仏が上なのです。そういう形で、人間を誘引して本願に遇わせるのです。本願の念仏に遇わせるのです。

人間の一般的な立場から、人間中心の立場からいうと、観仏の方が上なのです。観仏をできない者が念仏する、と。実際はですね、念仏の本願に目を覚ましてみれば、観仏なんか消えてしまうのです。念仏が絶対ということになる。けれども、そんなことを言ってもわからないのです。そこで絶対をかくして、相対の中に入れるのです。相対の中に入れるとなると、観仏の下におかなくてはならないわけです。まあ、そういう巧みな方法ですね。だから、善導大師は、定散の諸行を五正行というんだ、と語られているのです。善導大師は、定散の諸行と云ったわけですが、ところが、親鸞は、これを「定散の諸機」と云ったのです。『正信偈』に、「矜哀定散与逆悪」とこう書いてある。「善導独明仏正意 矜哀定散与逆悪」。定散というのは機だと。行ではない、行法ではない、定散の機によってたてられた行

なのだと。だから、本来、行というふうには云ってあるけれどもですね、行ではなく、人間の機根をあらわしているのですね。

定善・散善というのは、それは、行というものではない。行というけれど、機の色をおびている。行ではなく機なのです。人間が本願にふれないときには、本当の法がわからないから、それで、法でないものを法とするしか仕方がない。そうすると、人間の努力を法にするわけです。人間の努力を行にするわけです。それが、まあ、事情ですね。だから、本願がわからん者に、本願を示すような、誘引の教学が五正行です。だから『教行信証』では「化身土巻」に示してあるのですね。だけれども、五正行の中に、第四称名念仏は、正定業ですが、初めは、並べるのです。五正行という場合は、五種雑行に対して、五種正行を並べるのです。そして、並べておいて、今度それに批判を加えるのです。批判を加えるという時になるとですね、その念仏が正定業となり、あとは助業だということです。なぜ、正定業かというと、我々が決めたのでなく、本願の方が我々に歩みを運んでこられた行だからです。本願が我々に名告られた行なのですね。我々から出発して、本願に到達しようとする行ではない。こういうことなのです。その言葉に、法然上人はうたれたのです。法然上人は、その言葉で廻心したのです。感激して涙が止まらなかった、と書いてある。その一語で、法然上人は廻心されたのです。それは、貴重な文献ですね。

五正行というのは『観無量寿經』に立ったのですが、『浄土論』の五念門というのは、『大無量寿經』によってたてられた行です。だから、これは、先程言いましたように、「我依修多羅 真実功德相」と、真実ということをあらわすのです。方便ではない。真実ですね。だから、真実というようになことをいってもですね、真実とはまことをいうとかいってもですね、そういう話なら、総理大臣でもいいますよね。でも、それは、何の根拠もありません。できるだけのことを、よりまことにやったというだけのことだ。「より」がついている。比較級がある。しかし、本願よりまことということはない。これは、つまり、如来をまことというのです。如来をね。「如」というと真、真如という

意味。「来」を来という。如来以外に真実というのはいない。真実というのは、そういうことになる。如来のことなのです。だから、「唯仏是真」ということをいいます。『歎異抄』では、「ただ念仏のみぞまことにておわします」と、こういいます。だから、真実信心というのはですね、勝手に決めたのではないのです。真実の念仏によって賜わった信心だから、その信心を真実信心というのです。なぜ、信心が真実かということ、念仏が真実だからです。この信が行を決定するのではない。行が信を決定するのです。これは、非常に大事なことです。だから、親鸞は『教行信証』に、「行信」といわれているのですよ。行信と。行信ということは、何かというと、信行ということとは違うのです。教・行・証、これは一般にありますね。教行証は、一般に、法の組織です。信は、これは法ではない。仏法という場合だったら、これは、教行証。だから『教行証文類』というのです。

『教行信証』の名前は、『顯淨土真実教行証文類』と表わされ、『教行証文類』というようにはいってありません。それでは、「信」は何処に入るのかということですね。多くのは、「教」の後に「信」が入ります。これは、一般の教え方ですね。つまり、聖道の教え方です。聖道門の教え方というのは、人間の考え方に合うようにしてあるのです。人間の思考法に合うように組織されているのが聖道門の教え方です。それはやはり、教えを信解するのです。信解ということ、仰信することです。仰信するのは、つまり、人に対してのことです。仏さまに対しては、仰信。世間の方では、信仰といいます。仏教の言葉では、仰信ですね。それから、法に対しては、仏さまが書かれた教えに対しては、信です。ね。そういうようになります。それでまあ、信というのは何処にあるのかというと、教のところ、約されるのです。これが原則なのです。信は法によって立つ、という、これは、普通の公式を破っています。そこが、やはり、大事なところなのです。行信。普通では、信行といわなくてはならない。それは同じではないかと、そんなことを考えていては、話になりません。また、逆さまだけのことだと、そんなことを考えていては、話になりません。普通の場合なら、説教をする時は、信仰でもいいのです。別にあらためて、信心とかいわなくても

いいのです。世間の人が使っているから、世間の人が使う言葉で話せばいいのです。ただ、教学ということになると、そうはいかないのです。公のことですからね。教学の中に、そのような我流が入ったら、教学が成り立ちません。蔽密にしなくてはならない。信仰ということが、体験というようなことであればどうでもいいのですが、教というのは、道理を明らかにするのですから蔽密にしなくてはなりません。

我々は、道理で救われるのです。道理にかなうということが、先ず、大事なことです。人の信仰体験を聞いてみたところで、それは、参考になるだけではないでしょうか。これは、一応ありがたいという感じがおこるだけの話ではないですか。それも、たいした長い時間続くわけではないです。すぐ消えてしまいます。そんなことで、我々の一大事をほおっておくわけにはいかないのではないのでしょうか。あぶなくて。だから、曾我先生は、度重ねて「我が行信、彼が行信」といわれるのです。「彼」という字をつけて、彼の行信と区別をつけて、我が行信といわれるのです。「我」という字をつけてあるのです。行信論は、これが、浄土真宗の教学なのです。それは、どういうことかという、信に先立って行があるのです。そういうところから、曾我先生は、「はじめに行あり」と云われたのです。信に先立って行あり、と。信が行を決定するのではない。行が信を決定するのです。行がなければ、信を立てる場所がない。行がなくて、信を立てるのならば、我々の心に立てるより仕方がないのです。「散善義」に、「建立自心」という言葉があるでしょう。自心というのは、我々の主観という意味です。本当ならば、主観の上に信をたてるということはないでしょう。しかし、南無阿彌陀仏がなければ、我々の中で思想を練ったり、反省したりする、そういうようなところに信仰をたてるより仕方がありません。けれども、そういうものは、あてにならないです。よね。あてにならないというより、成り立っていないから、各人各人別々ですね。人間の信仰というものは、何十年という長い間かかって、聞法したという人もあると思う。また、きのう出発したというような青年二才の信仰もありますよ。よね。だからして、なかには、色々ある。男と女と違いますし、学生と老人と違いますし、各人各人で、百人おれば

百人が違うのです。人間の信仰というものはそういうものですよね。

ところが、南無阿弥陀仏ということになると、何十年聞法している人も、今日から聞法する人も、一つです。少しもかわりはありません。何も遠慮はいらないのです。年をとっているからといって、何もいばる資格などありはしません。そういうような、老若男女とか、智愚とかいうものは、消えてしまうのです。そういうものに、関係がないのを、法というのです。万人に公開されているのが、大道なのです。南無阿弥陀仏ということはそこに入ることになるのです。そこにたどりつくということです。善人は、善を威張る。悪人は、悪を卑下する。それは劣等感というものです。能力のある者は、自信をもって威張る。能力のない者は、卑下するのです。劣等感を抱くより仕方がないのです。自心というような信仰は、劣等感を覆いかくそうとする。そういうことになると、信仰に威張る人もいるわけです。何か世の中では、商売にも成功しないし、学校も出てないし、あるいは学校へ行ったけれど、劣等生で頭は悪いという人が、信仰ということに、たまたま何処かで触れて、「信仰のわからない者が、なにをやっているのだ」といって、江戸のかたきを長崎でというように、信仰で復讐しようと思うということがあるのですね。それは、劣等感があるからです。たいへんなことですが、そんなふうになるのです。それは、みんな、信仰の病気です。威張るのも、遠慮しているのも、みんな、人間の思いなのです。

南無阿弥陀仏で自己を立てる。その南無阿弥陀仏で自己を立てるのが主体性である。ところが、南無阿弥陀仏なしに自己を立てたら、そういう意味の主体は、主観的主体ということです。それは、独我論である。今日、世間で、主体、主体、といわれているのは、そういう意味です。南無阿弥陀仏なしの主体性でしょう。ただ、自己主張だけです。みんなが喧嘩しているのは、私の方が本当だといって喧嘩しているのです。私の方が間違っていたというのは、ひとりもおりません。みんな本当だというから、それで、世の中複雑になってしまふのです。みんなが、主体性を主張しているのです。私が変わった、という人間は、ひとりもおりません。私が本当だという、そういっているのが世間の

人たちでしょう。それは、人間に主体性を立てたからです。

本当はそうではないのです。法が主体性なのです。法によって、はじめて主体性が与えられるわけです。そういう意味で「我一心」というのです。こういうように、行によって信をたてるのです。こういうことが、非常にやかましくいわれます。五念門というのは、全体が念仏なのだけれども、その中に、まさしく、第二讃嘆門というのがですね、念仏の中に、称名を聞いて、称名讃嘆を明らかにしたのです。これは、第二讃嘆門です。先の五念門に配当するとですね。「世尊我一心」というのは、これは別です。信心ですからね。行ではありません。「帰命尽十方 無碍光如来 願生安楽国」。その「帰命」というのは、これは、礼拝門。礼拝門というよりは、礼拝ということ象徴するのです。礼拝というのは、これは、外面的なことですけども、帰命というのは、内面的なことなのです。だから、礼拝は、必ずしも帰命でない。帰命は、必ず礼拝である。すぐ同一するというわけではない。本当の礼拝というものを考えてみたらいいですよ。

この間、寺川さんが、インドへ行かれたのですね。インドに、釈尊が成道された、ブダガヤというところがあります。そこに、菩提樹があります。それは、まあ、釈尊が坐られたときの菩提樹ではないのでしょうかけれどもね。もう二千年も前の話ですから、それは、枯れてしまっています。その後、また生えた菩提樹があるのです。釈尊は、菩提樹下に坐られたのです。樹下石上です。石の上に坐って、三昧に入ったのですね。そこで、十二因縁を觀察してですね、覚りをひらかれたのです。そこに、寺川さんが参られたのです。そして、どうしてもですね、五体投地して、投げ出すような気持ちになったというのです。帽子をとって礼拝するだけではすまないのだそうです。まあ、仏教徒としては、そうでしょうね。大地に投げ出して、拝みたいという気持ちになるというのです。まあ、実際に拜んでこられたかどうかは知りませんがね。そういわれるとそうでしょうね。日本から行った者にはおりませんが、チベットだとか、ビルマから来た僧侶ですね、彼等が、五体投地しているのだそうです。実際、大地にですね。膝まづいて、

身体をのばして、そして、また起きてというのですから、一回の礼拝には、ひまがかかるのです。それを一日ぐらいかかって何回もするのです。礼拝というものはそういうものらしいのです。ちょっと、そこで頭から帽子をとって、拝んだりするというものではないのです。五体投地して、全身を投げ出すところに、礼拝があるのです。そのように、自分を忘れてやってしまうのは、ある面では、キザに見えます。礼拝というのは、これ、人間の努力です。人間は、努力しても、いい加減な努力しかできない。形だけの五体投地はできるけれども、本当の五体投地、これがなかなかできない。そういうことですね。五体投地というのはどういう意味かというと、自分が、きのうまで足で踏んでいた大地、それが、本願であった、と。

自分が、自分を忘れて、高あがりしていたのだと。そして高あがりしていたにせよ、本願の上を歩いていたのです。本願の上に立っていないながら、その本願ということを知らなかったのです。踏みつけていたのです。馬鹿にして。それに、目を覚ましたのです。そのとき、五体投地せずにおれますか。それが、本当の意味の礼拝というものです。南無と言えば、そこに徳が成就しているのです。五体投地をして、全身を投げ出すような、その徳がですね、「南無」という一語で与えられる。廻向されているのです。こういう意味です。「南無阿弥陀仏には、それが廻向されている。

だから、讃嘆というふうなこともですね、善導大師の五正行の中では、称名と讃嘆は、別になっています。第四は称名、第五は讃嘆です。我々が讃嘆する、本願の徳をたたえる、というけれど、それも、いい加減にしているだけの話です。先程の、五体投地の場合にですね、本願というものに立ってみるとですね、諸仏称讃と、こう云ってあるのです。本願の徳というものは、凡夫では、たたえることができないのです。本願の徳をたたえるといえますけれども、人間に本願の徳が測れるのでしょうか。仏の徳が測れるのでしょうか。仏の徳を測れるのは、仏です。それで、仏仏相念というのです。仏の徳を測るということは、仏でなくてはできません。唯仏与仏だ。唯仏与仏の智見なのです。いい加減な意味で、讃嘆というのでしたら、なんでもありません。しかし、讃嘆ということですね、それ

が、第十七願によって成就されているのです。讃嘆ということが、本願によって成就されているということです。けれども、人間は、讃嘆を本願なしにできると思っているのです。そうではありません。本願でないと成就しないのです。諸仏の讃嘆。仏が仏を称讃するような讃嘆がですね、それが諸仏称名です。それが、本当の意味での讃嘆ではないですか。しかし、そういうように、諸仏にしてはじめてできる讃嘆がですね、「南無」と言えばそこに成就するのです。念仏によって、どんな衆生にも、諸仏称讃の徳が廻向される。

讃嘆と称名という意味が一つになっているのが第十七願です。諸仏称名の願といい、諸仏咨嗟の願という。称名と讃嘆が一つになっているのは、本願の上では、第十七願です。論の上では『浄土論』の第二門。そこに讃嘆門という。「如何が讃嘆する」。「彼の如来の名を称するに」。「彼の如来の名」と、そうなっておりますね。また、『論偈』にも「彼の世界を觀するに」、「彼の如来の本願を觀するに」と、「彼」という字がだいぶ出ているでしょう。それはどこから来ているかというと、やっぱり『浄土論』から来ているのです。「彼の如来の名」というのは、本願の名という意味です。本願の名、南無阿弥陀仏。こんな意味ですね。これが、『浄土論』で、いかに大事であるかわかります。称名讃嘆。称名をもって、讃嘆をあらわしてあるのです。これは『浄土論』と四十八願にしかありません。五正行では、別々です。だからして、親鸞は、『教行信証』の「行巻」の中で、それを云っています。第二讃嘆門の文によって、第十七願と、そして、大行の証文としておられます。五正行にはよってられません。それほど大事なのです。

そのようなことで、五念門は、全部が念仏であるが、その中心はどこにあるか。『浄土論』というものを、純粋に配列するとすると、いろいろと考え方がありますが、その中心はどこにあるのかというと、曾我先生は、『願生偈』だから、やはり、「作願門」が中心でないかといわれるのです。礼拝・讃嘆・作願・觀察・廻向と、こうあります。その中で、「作願門」が中心でないかと。こういう具合に、曾我先生はいわれるのです。これは、曾我先生の考え方

ですが、私は、作願、観察の二つが中心ではないかと思うのです。作願と観察、これは、離れたものではない。ただですね、作願ということは、作願観察と作願廻向と、二つにかかるのです。作願観察という場合は、浄土の観察。作願廻向という場合は、穢土の観察です。穢土の衆生を観察するのです。そういうふうには、方向があるのです。往相と還相というふうには二方向があるようにですね。「作願」「観察」という字が、浄土の行ということ、一番よくあらわしています。浄土に作願する。それで、浄土を観察する。つまりですね、作願といったときに、すでに浄土に生まれているのです。

願生浄土の心を、我々が発こした時に、我々は浄土の中に入っている。それで、浄土の中に入って浄土を観察するのです。外から観察しているわけではないのですね。先程いったように、自心というところで浄土を観察しているのは、外から観察しているのです。我一心と、一心をおこしたときにですね、本願というものが、五念門の行として、我々の全身全霊にゆきわたる。本願に目覚めて、あるいは、一心と目を覚ましたときにですね、その、目を覚ました一心の上に、目を覚ましたという自分の身にですね、本願そのものが湧き出してくるのです。湧出です。湧き上がってくるのです。ちょうど、道路工事をしていて、水道管にポンとつるはしが当って、水が湧きおこってくる。そんなようなものです。「念仏申さんと思ひ立つ心のおこるとき」と、こう云ってありますね。それをいうのです。「申さんと思ひ立つ」というのは、噴出してくるのだ。そうして、我々の全身全霊を満たしてしまう。我々を占領してしまうのだ。それを言うのです。

浄土に生まれて、浄土を観察する。浄土に生まれるのを作願という。それから、浄土を観察するのを観察という。浄土に生まれて、浄土の智慧をいただく。この浄土の智慧で浄土を見る観察なのです。こういう意味で、作願、観察というところに、浄土の生活が語られているのです。まあ、これが中心ではないですか。曾我先生は、作願が中心だといわれるけれど、作願だけでは足りないのではないのでしょうか。作願、観察というのが浄土の生活でしょう。穢土

においても、浄土の生活というものをもつ。まさしく、浄土の意味を語っているのが、作願、観察です。礼拝、讃嘆は、その準備です。そして、浄土の生活から後に何が随伴して起こるかというところ、廻向ということが随伴して起こるのです。中心は、作願、観察です。こういう具合になっています。それを、読んでゆく場合に、だんだん移動してきまして、曇鸞大師になるとですね、第二讃嘆門が中心になります。中心が移動するのです。第二讃嘆門、そこにまさしく、称名念仏の行というものがあるのであります。

作願、観察といっても、それは、念仏のことなのです。外にそれがあるのではないのです。本願の念仏は、称名です。それは、「念称は一」です。法然上人が云われたのですね。念仏と称名は、一つだと。これは、すべて称名念仏の話です。本願をはなれてしまうと、称名と念仏は別なのです。称名は、口で仏の名まえを称えるということですから。それではそのとき念仏は、どうなるかということ、念仏ということなのです。観仏と念仏ということになります。仏の三十二相を観察、観念する。そういう観念と、それから、称名と、二つ別々のことなのです。それでは本願の念仏はどうなるかということ、観念することではありません。憶念することです。本願を憶念するということが、本願の念仏。それがつまり、称名です。本願というところに立ってみれば、称名のほかに念仏はない。念仏と称名が、一つになっている。本願をはなれば、一つということはない。観仏と念仏は、別々です。五念門ということ、「念」という字を、五念門の全部に配当してあるけれども、まさしく、称名ということを示したものは、第二讃嘆門ですね。念仏というものを、まさしく、本願の念仏の行と明したものは、第二の称名讃嘆の門です。そこに、第十七願が出ているのです。

ある意味からいうとですね、親鸞の四十八願の解釈というもので、これまでの三国の高祖の伝統にまったくなかったのは、第十七願を発見されたということ。大行の願と今日盛んにいっていることですね。信といっても、行がないとだめだということです。行の願を、第十七願ということです。これまでは、そういう具合に考えなかったの

す。念仏往生の願が行の願だと考えられていました。第十七願というものを、行の願だと考えなかったのです。親鸞がはじめて考えたのです。それは、大事な意味を持っていたのですが、それを、よく考えてみれば、親鸞が考えたというより、『浄土論』にきっちり書かれているのです。五念門にです。第十七願の諸仏称讃というものをもって、念仏というものを明らかにするのです。だから、まあ、親鸞聖人もですね、やはり『浄土論』みたいなものにふれて、大きな暗示を得られたのです。第十七願というものに、意義を見いだしたという一つの示唆というものを、そこに見られるでしょう。

天親は、作願、観察です。作願、観察が中心です。ところが、曇鸞は、第二讚嘆門です。親鸞になるとどうなるかというと、一番終わりに、廻向門がありますが、親鸞においては、廻向門が中心だということです。「廻向為旨」、廻向をはじめとせず、ということ。廻向をはじめとするとというのが廻向門です。一番終わりの廻向、それが五念門のはじめなのです。自力というような立場から考えると、廻向は一番終わりなのです。自分が行じて、また、他の衆生に廻向するというように、自力ということから考えると一番終わりなのだけれど、実は、その一番終わりが始まりなんです。五念門は、ここから出てきたのです。そういうことがおさえられているのではないのでしょうか。これが、非常に大事なのです。

南無阿弥陀仏ということ、称名、称えるというようなことに考えていたけれど、それは、名号が大事だということです。それは、廻向という意味を持っていたのだということです。だからして、親鸞は、第十七願を「往相廻向の願と名づける」、こういうように云っておられます。「往相廻向の願と名づくべし、また、選択称名の願と名づくべきなり」と、こう云われている。「べきなり」ということです。親鸞の己証の名前ですから。親鸞がはじめてそういう意味を見いだしたのです。諸仏称名ということは、本願にそう書いてあるのです。親鸞は、その中に書いていない意味を見いだしたのです。それは、往相廻向の願ということ。やはり、これは、『浄土論』によっていますね。南無

阿弥陀仏という、そういうところにね、称名の名号があるのです。本願に、名号もあるのではない。名号が全体なのです。一切が、南無阿弥陀仏の一点に集中されているのです。信心というのもそうです。南無阿弥陀仏によって、信心が廻向されるのです。だから、往相もあり、還相もあるのです。そして南無阿弥陀仏というところにですね、浄土もあり、南無阿弥陀仏というところに穢土もあるのです。

親鸞以前にも、なにかそういうことがありましたけれども、親鸞以前では、仏の名前を称えることによって、仏の国に生まれると考えていたのです。しかし、親鸞からいえば、仏というものは別にあるわけではないのです。南無阿弥陀仏が仏なのです。名号が仏なのです。名号が仏身なのです。こういうことなのです。そこに、現実の仏がある。描いた仏ではなく、現実の仏です。つまり、行仏ですね。南無阿弥陀仏は、大行ですから。行としての仏。行の仏がそこにあるのです。こういうわけです。親鸞教学の面目というのは、そういうところにあるわけです。いわゆる教理を超えているでしょう。そういうものが、本当の教学というものです。そう言うことができるのです。そうでない教学は、教理です。理屈をいっているだけでしょ。そうではなくて、「行仏ということがあるのです。これは、教理ではないでしょ。本願が、我々の妄想を破って、我々に名告ってですね、それで、我々を本願に転じてゆくような働きですよ。それが仏だ。仏にする行が仏なんだ。生きている仏なんだ。そこらに飾っておく仏さんではないのです。」

親鸞が、たえず語った言葉が二つあるのですが、その一つに、「教信沙弥の定」というのがある。それは、加古川の人です。因幡の若狭というところがあります。山陰道と山陽道の行路ですが、教信沙弥という人は、若狭から加古川までの間を馬子うまこを引いて、人や荷物を運んでいたのです。教信沙弥を、親鸞は非常にあこがれたのです。あこがれというのは、できなかつたのではないでしょか。できているのだったら、すぐに馬子になったりするのですが、で

きなかったのです。教信沙弥というのはね、名号を掛けなかったのではないだろうか。仏間も何もなかったのではないか。馬と一詣に歩く、それが念仏だったのではないでしょう。完全に仏者という姿を消している。それが、純粹というものです。形のあるのは、純粹ではないのです。しっばを出しているのです。本願にふれて、人間はどういう人間になるかというと、くさみのない人間になるということです。抹香くさい人間ではないのです。ありがたがりやじゃないのです。味噌の味噌くさは、上味噌ではない。臭がしたらいけないのです。馬脚をあらわしたということ。なにも、人がとらえようのない人間、つまりそれが凡夫です。凡夫の「凡」は、平凡という意味です。平凡にかえたのです。そういう人の代表者を、法蔵菩薩といます。そこが、阿弥陀仏のお姿なのです。法蔵菩薩というのは、凡人なのです。目立った菩薩ではない。目立った菩薩は、観音、勢至です。これは、目立った菩薩を代表しているのです。法蔵菩薩というのは、阿弥陀仏になってからわかったのです。それまではわからない。そうではないのです。そこに、本当のものがある。あとでわかるのです。そんな偉い人とは思わなかった。なんとも思わなかった。そういうところですね、清沢先生は、落在するといわれるのです。さっき読んだ本には、現在に安住すると書いてありますけれど、そうではなく、現況に落在するのです。現前の境遇にね。安住ではなく、落在です。凡夫そのものになりきるということです。

このようにですね、五念門の中心が確かめられているわけです。天親菩薩は、作願、観察。曇鸞大師は、第二讚嘆門。親鸞では、廻向門。だから、楕円形のように、二つの中心ができたわけです。第二讚嘆門と廻向門が、五念門を代表しているではありませんか。まあ、一番大事なのは、廻向ということですね。廻向の行というものがそこにあります。そういうことを考えてみるというと、讚嘆門を解釈するとき、「如実修行」といわれているのです。讚嘆とは、どういう意味かというと、「彼の如来の名を称する」というのが讚嘆ですね。称名ですから。「彼の如来の名を称する」

について、「彼の如来の光明智相の如く」、それから、「彼の名義の如く、如実修行に相應せんと欲するが故」である、ということなんです。ここは、よく文章がわからないのですけれども、こういうことなのです。何が讃嘆の行であるかというのと、「彼の如来の名を称する」のが讃嘆であるということなんです。讃嘆というのは、仏の徳を讃嘆するのです。仏の覚られた徳を讃嘆するのです。この仏の覚られた徳というのは、仏でないとはわからない。ところが、その徳に、名前が与えられてあるのです。わからない仏の徳を、誰でもわかるように表わしてあるのを「名」というのです。そうでないと、名という意味がない。だから、名によって、仏の徳を讃嘆する。名によって、仏の覚りを讃嘆するのです。

その内容は、仏仏相念の法ですね。仏と仏とが相念する。それは、覚りです。それは、大涅槃の境遇です。大涅槃界というものを、仏の覚りを、大涅槃というものの徳を、仏の自内証を、象徴するのですね。「如」という字がついていますが、如何、ということなんです。如何に讃嘆するかということ、「彼の如来の光明智相の如く」、又、「彼の名義の如く」讃嘆するのです。これは、讃嘆する仕方です。二つ書いてあります。それから、ここに「故」という字があります。これは、何故に、ということなんです。何故に讃嘆するかということ「如実修行に相應せんと欲するが故」です。これはですね『浄土論』を、文章通り読んだ場合は、こうなるのですね。この、如実修行というのは、何かということ、作願・観察のことです。「如実修行」、これは、止観というのです。奢摩他・毘婆舍那ですね。つまり、浄土に生まれて、浄土を観察するというのは、浄土止観です。止観という言葉は、仏教では、行なのです。これは、人間が決めたことではない。原則として、決まっていることなのです。天台宗の摩訶止観とか、諸法唯識の止観とか。いま、浄土は、浄土止観です。

念仏三昧ということにおいて、本願を観察するのです。念仏三昧は、浄土三昧です。それに住して、浄土をして浄土を生み出している本願の徳を観察する。だから、止観が如実修行です。讃嘆は、別に如実修行ではない。如実修行

に相応しているのが、これが讃嘆。如実修行に相応したいがために讃嘆する。まず、名前によって、仏の徳を讃嘆する。その讃嘆する仏を観察する。仏の世界に生まれて、仏を観察する。だから、如実修行というのが中心なのです。それに相応したいというのが、讃嘆です。如実修行に相応したいから讃嘆する。これで、文章がよくわかるところです。はじめは、文法通り読んでゆかなくてははいけません。我流に読んではいけません。ところが、親鸞は、それを変えて読んだのです。続けて読むときには、「彼の名義の如く如実修行し相応せんと欲するが故に」と、こう読むのです。けれども、「彼の名義の如く、如実修行と相応せんと欲するが故に」と、こういうように変えたのです。だからして、親鸞の訓点では、なにか少し変わって、「相応」ということをですね、如実修行と相応したいといいますが、これは、名義と相応したいということですね。名義というのは、名前の意味です。仏の名というのは、義をあらわすのですよ。そして、義とは何かというと、これも、いろいろの解釈があるのですが、香月院なんかは、この名義というのは、称名のことだ、ということです。光明無量というのは、その意味だと。これは、まあ、あまりにも平凡な話です。「彼の光明智相と名義と。」「と」「と」と書いてあるのだから、これは、区別しなくてはなりません。そうすると、これは、本願という意味なのです。彼の光明智相のごとく、また、本願のごとく、と。本願の御心に相応した、と。本願の御心に相応するのを、如実修行というのです。

まあ、さっき言いましたように、作願、観察ではなく、本願の念仏ですね。称名念仏を如実修行というのです。称名念仏が如実修行です。本願の念仏ということも本願をとってしまおうとですね、止観というような一般的な意味の行になる。本願の立場で、行ということを考えたら、念仏ということしかありません。称名念仏です。仏の本願を憶念するという念仏ですから、それが、如実修行ですよ。それが、仏仏相念の行です。本願は、因です。仏の名前というのは光明、尽十方無碍光といわれますが、それは、果上の徳を代表する。また、因位本願を代表している。称名念仏、念仏というのは、これ、「憶念弥陀仏本願」です。果位は、名号なのです。その名号があるから、念仏すること

もでき、称名することもできるのです。称名といった場合、覚りの果徳を称讃するということです。だから、念仏といた場合は、因位の本願を憶念することです。大悲の本願を憶念するというのが念仏です。だから、因位の本願を憶念し、果上の徳、つまり本願によって廻向される仏の徳を讃嘆する。こういう意味がありますね。本願の行、それは如実修行というのです。しかし、相応するのは、讃嘆ではない。讃嘆が如実修行なのですね。相応は如実修行です。これは、『和讃』に、「如実修行相応は、信心一つにさだめたり」とあります。相応は信心だと。大変文章が変わってくるというわけですね。南無阿弥陀仏によって、信心のまなこを開いたときに、その南無阿弥陀仏に相応するのは、南無阿弥陀仏によって、我々が、信の一念を知る。その、信の一念のところに、南無阿弥陀仏にかわる。だからして、行というものを中心にして考えらるゝとすね、行というのは、南無阿弥陀仏だけでも、南無阿弥陀仏というのは、仏においては、行です。我々がいただいても行です。そして、我々からいうと、南無阿弥陀仏は、信心です。我々の側からいうと、南無阿弥陀仏の信心です。そして、仏からいうと、南無阿弥陀仏の行です。そうなるでしょう。

行信は、一つです。行と信は、南無阿弥陀仏として一体なのです。信とは南無阿弥陀仏の行につけ加えたのではなく。その南無阿弥陀仏の行だけけど、信のまなこを開くときに、それに相応するのです。相応すれば、行そのものが、南無阿弥陀仏に生きてくる。湧出してくる。こういうふうな構造になるのですね。だから、親鸞は、「かるがゆえに、論主天親菩薩は、はじめに我一心とのたまえるなり」と云われるのです。それで、如実修行相応をあらわすのです。如実修行相応せんと欲するが故に、それだからこそ、天親菩薩は、我一心といわれたのだと。一心が、如実修行相応である。細かいことは言いませんけれど、行ということが大事なのです。これは生活ということですね。仏法が生きているか、生きていないか、ということは、生活があるかないかということですね。真実だ、といっても、生活がないような真実は観念論です。それを、曾我先生は、「願に生きる」と云われたのです。それが生活なのです。生活者で

ないといけません。信者ではいけないのです。そういう意味で、本当の信心というものは、行が成就しておる。信の一念に、行が相應する。相應するというのは、面白いもんですね。行があって、又おこなうということではない。ある行にうなづいたら、それは、相應しているのです。打てば、ひびくのです。仏の行を、我々にもってくるのではない。仏の行に目を覚ましたら、そしたら、仏の行そのものが我々に満ちてくるのです。それで相應するのです。仏の行のまねをして、仏の行をおこすのではない。それは行ではありません。

（本稿は、昭和四十九年十二月十八日、岐阜県慈光会主催の『入出二門偈』の会における講義の筆録を整理したものである。文責 編集部）